

高澤寅男の生涯

戦 後 革 新 の 50 年





刊行にあたって

一九九九年八月五日、高澤寅男氏が急逝されてから、早くも一年の月日が流れた。この間にも、国内外の状況は激しく動いている。だが、多くの暗く危うい事件があいつぐなかで、新たな世紀の曙光は未だほのかにしか見えない。厳しい歴史的現実が投げかける課題に如何にこたえていくか。私たちは、いま、一人一人の感性と知性をとぎすまし、過ぎた年月の経験から学びあい、語りあうべきときに生きていると思う。

本年春、私たちが高澤寅男氏の歩んだ道をふりかえる書物の刊行を企画したのも、そのようなおもしろいからである。私たちは、彼が歴史の節目、節目に論争風に発表した論文などを集めるだけでなく、日本社会党左派の理論家としての「筋」をとおそうとした彼の言動についての、近くにいる方々の率直な感想を集めることができれば、と考えた。そこから、いま必要な対話のきっかけが生まれるかもしれない、と思ったからである。以下、私たちが本年五月に故人の遺したアドレス帖などをたよりに、発送した「ご寄稿のお願い」文(抜粋)を掲載しておく。

早いもので、高澤寅男さんが急逝されてから、半年以上がたちました。その間に、多くの方々から、高澤さんの「進想録」を刊行できないものか、という声がよせられました。戦後日本の革新運動の一翼

をになった、日本社会党の党员として、またリーダーとして、さらには国会議員として、高澤さんが活躍したその足跡は、革新運動の発展を願って、ともに生きてきた者にとって、決して他人事ではなかったように思います。

もちろん、旧ソ連圏が崩壊して、その内幕が明らかになった今日では、ソ連中心の社会主義に夢を託していた、当時の高澤さんの言説に、同調する方は少ないでしょう。社会党の理論家として注目されていた、高澤さんの「理論」に、さまざまな制約があったことも事実でしょう。それは晩年の高澤さん自身が、率直に認めていたことでした。しかし、高澤さんは、ご自分の戦中・戦後の体験をとおして固めた「平和と民主主義」への渴望、それを体現する憲法擁護の信念の強さ、さらには論争相手を排除しない大らかさなどで、私どもを引きつけてきたと思います。高澤さんには、革新勢力の統一戦線を如何に強めていくか、という志が一貫していたように思われるのです。

経済的にはもちろん、政治的にも多事多難な昨今であり、二一世紀の展望もさだかではありませんが、それだけにまた、私どもの身近にいた高澤さんのことを、折りにふれ想いおこし、彼の志をこれから生かす道を探っていくことができるならば、と希望しています。

そこで、生前に高澤さんが信頼し、交流も深かった方々に、お忙しいなか恐縮ですが、ご寄稿をいただきたく、お願いする次第です。高澤さんの政治的活動についての、評価なども含めて、率直なご感想を、お洩らしいただけるならば、この刊行事業を契機として、新しい交流がはじまるものと期待いたします。

本書は、右のような「お願い」に応じて下さった方々の文章を生かしながら、高澤寅男氏の足跡を記録しようとしたものである。論文、エッセイなどの渉猟、そこからの抜粋、年表の作成、全体

の解説などについては、長い間秘書として近くにあった浦口俊郎が刊行委員の意見をもとめながら担当した。

最後に、この刊行事業については、ご遺族のご支援、ご協力をいただいたことを申しさえる。

二〇〇〇年一〇月

刊行委員会

- 浦口俊郎 (しらかば工取総役)
- 遠藤直栄 (練馬区職員労働組合顧問)
- 岡田浩平 (早稲田大学教授)
- 田代尚子 (白川建築設計事務所)
- 塚本 健 (流通経済大学教授)
- 戸塚秀夫 (国際労働研究センター所長)
- 林 亮勝 (天正大学前学長・教授)
- 広田貞治 (前都議会議員)
- 山口 広 (弁護士)

【アイワエオ題】

私が特に思い出深いのは、高澤さんが衆議院議員として華やかに活動していた時期ではなく、むしろ、選挙に落選して、少なくとも公的には、自分の政治的な理念に基づいて行動できる場から遠ざかり、おそらく御本人としては失意のうちに在ったのではないと思われる時期における彼との交流です。

高澤さんは、政治の捨舞台に立っていた時にも、驕り高ぶる風情などまったく無く、こういう人が政治の指導者になるといいなど思っていたのですが、表舞台から離れても、一時期有名人であった人の陥りやすい、傲慢さと世を拗ねた態度が表裏一体となったかのような雰囲気など微塵も無く、私ども旧来の友人との気の置けない付き合いが一層深まった感がありました。

私が高澤さんにもっとも深い友情を感じたのは、そのような時期の或る冬の夕、有楽町での会合のあと、二人だけで山手線に乗っていた時でした。確か高澤さんは帽子を被っていたと思うのですが、多少酔っていた私どもは、取り留めの無い語らいを交わしていました。

う「自慢話」があり、「終戦の詔勅」放送のあと、その年の春に入学していた陸軍士官学校から脱けだして家に帰り、学校からの命令電報で呼びもとされたという「武勇伝」があった。さらに、復員して一高に入るまでに、甲府の共産党のリーターの家に入出入りして、そこで出会った女性が恋人になっている、と先輩風も吹かしていた。海軍兵学校予科から中学に復学して、四年修了で一高に入ってきた私には、それらすべての経験がなかった。彼が兄貴格として振舞ったのはごく自然であった。

その年の冬、私が彼にひきつけられる事件がおこった。歴研の上級生たちの首頭で、英語文献の輪読会が始まったときのことである。何が輪読のテキストであったのか、思いたせないのだが、余り面白いものでもないがこれもおつきあいか、と参加した私の目の前で新入生の「反乱」がおこった。「こういうつまらん本を読むのはやめにしないか」と高澤が発言し、気短かな上級生の一人が「外に出る」と怒鳴り、折角の輪読会がお流れになった、という事件である。議論のやりとりは覚えていない。あまり中

思えば、その時の高澤さんは、何とは無しに自分の死期の近いのを察知することによる、一種の諦観とでもいうべきものによつて醸し出されたかのような、得も言われぬ穏やかさを漂わせていました。その一時、私の心は救かでした。短かつたとは言え、あのような時間を共有させてくれた、彼の友情に、今でも心から感謝しております。

得難い女を亡くしました。高澤寅男さんの御冥福を心からお祈りいたします。

小さな「反乱」に 立ちあつて以来の仲

戸塚秀夫

長く深いつきあいであった。出会つたのは旧制一高文乙のクラス。共に歴研研究会(歴研)の部屋に入った。一九四六年秋のことである。高澤は二〇才、私は一六才。彼には、旧制中学を卒業して葡萄酒会社につとめ、早くからワインをラッパ飲みしたとい

味もない議論だったのだろう。だが、私は彼の言動彼の物おししない態度に爽快さを感じた。ごく小さな事件であつたが、身近な場での「反乱」であつた。私はその場では沈黙していたにちがいないが、高澤との深いつきあいが始まったのは、この時からである。

このあと共に歴研をでて哲学研究会に移り、共に一高共産党細胞に入り、共に学生運動に深入りし、東大では共に退学処分を受け、等々。共に歩んだ人生の思い出はつきない。ほぼ半世紀の間、実の兄弟以上のつきあいをした。政治主張に首をかしげることはあつても、あの小さな事件で感じた爽快さは一貫していた。彼が国会議員のポストを失つてから、私は度々、戦後の日本の社会党の歴史、とりわけその左派の栄光から挫折にいたる歴史をふりかえる研究会をはじめないか、ともちかけた。彼だけが知っていることも多いに違いない、と確信していたからである。たとえば、学生運動の時代に共産党員であつた「同志」たちが、社会党に入ったあの選択の顛末。結局、私も共産党から離れたが、一九五四年冬、

共産党第六回全国協議会の前に、共産党にいま一度もどらないか、という話をもちだしたのは高澤だった。ソ連や中国の共産党と社会党との関係についても、彼が属した社会主義協会の内情についても、彼は多くを知っていた筈である。

もちろん、酒をかわしながら断片的に耳にしたことは多い。だが、資料でかためながら書き遺してもらえないか、という私の希望に対してくり返された彼の返事は、それは自分には無理だ、ということであつた。優しく律儀であつた彼には、重苦しすぎる仕事だと思われたのであろう。しかし、過去の正負の遺産に眼をむけなくて、革新の未来はない。それは私たちの共通の立場であつた。彼とのタイアローグが突然に打ち切られたのは、残念至極である。愚直なほどに初心を貫ぬこうとした彼は、私にとって、うつろい易い自分の位置を見定めるうえでの大事な定石であつたように思う。

一番奥の三台目の机で、机上の本箱越しに高澤が見える場所でした。彼と共に過ごした寮生活は私の卒業で六ヶ月と短かつたが、後年の彼の政治家としての大成を予感させるものがあつた。彼の話は理路整然、自信に満ち説得力があつた。哲研の最年長で、包容力もあり仲間への信頼が増すにつれグループリーダー的な存在になつて行つたのではなからうか。なによりも彼は政治家として最も必要な素質を生れながらに持つていたのではあるまいか、即ち節操と勇気と強固な信念にもとづく実行力である。

社会党左派の高澤の輝かしい政治活動は衆知の通りだが、一九九一年の旧ソ連邦の崩壊はショックだつたらう。それにしても、昔に愛された寅さんの死は余りにも早すぎた。後藤昌次郎先生の中央法律会計事務所開きが一九九七年二月三日にあり、君と上田耕一郎参議院議員・安西史郎と私の四人で撮つた写真が振り取めになつてしまつた。

哲研の仲間は君のことを生涯忘れないだろう。

(元フジエー社長)

高澤寅男君を悼む

舟山晟

高澤との出会いは三年生の原口嘉明、嶋田豊、私の三人が発起人となつて昭和二三年秋に結成した「高哲学研究会(以下哲研)である。当初マルクス・エンゲルス研究会で旗揚げする積もりでした。GHQを刺激してトラブル発生の恐れがあるから、哲研にした方が良からうとの舎監の真下信一先生のアドバイスをうけ、哲研となつた。

真下先生を顧問に戴いた哲研はマルクス主義に関心を持つ後者が多く集まつた。高澤が何故哲研に入つたのか、本心は聞かず仕舞になつたが、ある日二人の入会希望者があり面接した。いずれも長身でがっしりした体躯の持ち主で自信に満ちた面魂をしている。陸士の高澤寅男と海兵の戸塚秀夫である。哲研の部屋は中寮二八番二九番で廊下を挟んで夫々自習室と教室になつていて、二人は二九番自習室の真ん中の机に向かい合つて席を決め、私は同じ部屋の

中寮二八番にて

本間元雄

私は中国からひきあげて一九四七年に「高」に編入となり、中寮二八番南側、唯研の部屋を選びました。そこで高澤と同室になつたのですが、二八室は上級生も下級生もない敬称抜き言葉でした。また戦争中の嫌な思いが残っている私には大きな感激でした。駒場寮の話となるとどうしてもやはり敬称抜きになります。ところで寮の風景ですが岡田、安西などのベッドの位置ははつきりと目に浮かぶのですが高澤がどこにいたか思い出せません。あまり定位置にいなかったからかも知れません。それでも高澤の「ヘーゲルの精神現象学は」などと議論しているのが目に浮かびます。フオイエルバッハ論、ドイツ・イデオロギイなどと私も分からないながらもともに勉強したのもこの頃です。一九四八年になると来なかつたのは軍艦だけといわれた東軍争議があり、私たちも応接にいきました。唯研が哲研になつたのはいつ

倉塚平先生を偲ぶ1 倉塚平氏の思い出—— 明治大學政経学部での出会いなど

- ・ 2012年 6月 28日
- ・ スタディルーム
- ・ 倉塚平 戸塚秀夫

<戸塚秀夫(とつかひでお):東京大学名誉教授>

はじめに

倉塚さんの訃報を友人たちに伝えたとき、「偲ぶ会」をもてないか、という声を届けてくださったのが松沢弘陽氏であり、それに直ちに賛同してくださったのが和田春樹氏であった。このお二人に登場していただければ、倉塚さんの学問と実践の全貌が浮かび上がるに違いない、というのが私のアイデアであったが、ともにペーパーが準備された立派なご報告であった。それに較べれば、私の話は即席の雑談程度のもので、ここに収録するのも気恥ずかしいのだが、倉塚さんが生きた時代、ベースとした職場の雰囲気をつたえるつもりで、少し手を入れて投稿することにした。学者の道を歩み始めた彼の初心に接した当時のことが、私の倉塚論の前提になっているように思うからである。なお、「偲ぶ会」で刺激されて調べたこと、宿題として意識したことについては、補遺としてメモすることにする。

明大政経学部での出会い

1959年4月、倉塚さんと私は明治大學政経学部で顔を合わせるようになった。倉塚さんは助手として、私は専任講師として採用されたのである。東京大学への入学年次では一年先輩、大学の卒業年次では二年先輩であり、すでに学術誌などに業績を出し始めていた彼が、同じ学部の助手であることには、当初、多少の違和感があった。それだけでなく、後に述べるような蟠りもあった。だが、やがてそれも打ち解けて、深い付き合いができるようになった。その経緯を率直に記しておきたいのである。

まず、私たち二人の出会いを可能にしてくれた、当時の政経学部の先生たちのことに触れておきたい。当時は全国的に新制大学・大学院の整備・拡充が教育行政の課題になっていた。明治大学の古参教授の間でも、新しいカリキュラムの整備とそれを担うべきスタッフ募集の必要性が意識され始めていた。政経学部内でも、大教授の招聘だけでなく、他大学での徒弟修業を終えた若い研究者からの採用をしてみてもどうか、という声が強まったのであろう。倉塚さんを助手として採用したのは、政治学科の主任教授、秋永肇先生であったが、秋永先生ご自身の明治大学への着任は1954年であった。秋永先生はその2年後1956年に、東大法学部の助手であった田口富久治氏を専任講師として迎えている。その3年後に、同学部の旧制大学院に籍を置いていた倉塚さんを迎えたわけである。

私が政経学部採用された当時、「秋永人事」という言葉を度々耳にした。政経学部を強化するためには、教授が自分の弟子を養成するシステム、——当時は“inbreeding”と呼ばれていたが、それに頼るだけではだめで、外から新しい革新的な血を入れることが必要だ、という考え方を意味しているように思われた。具体的には、適当な候補者がいれば、履歴・業績などをみたくて語学と面接の試験をおこなって決定する、そういう手続きですすめる人事。私が東大の大河内一男教授のもとで新制大学院を修了する人間だということで、全く面識もなかった明治大学の元学長、小島憲教授の「弟子」になれたのも、倉塚さんが秋永研究室に入ったのも、「秋永人事」の線に沿っていたのかもしれない。田口さんははっきり記憶していないというのだが、田口さんが秋永先生と相談しながら倉塚さんの人事を進めたのではないか、というのが私の推測である。

倉塚さんの場合は、自分より一年後に同じ学部を卒業した者が専任講師になっている職場に助手となって就職する、という話である。自由に勉強できるところであれば文句は無い、という気持ちだったのであろう。彼は給与その他待遇上の不利を承知のうえで、あえて学者への道を選んだのである。並々ならぬ決意が秘められていたに相違ない。

明らかに、彼の選択は正しかった。「秋永人事」は研究者としての資質と研鑽の意欲、業績の可能性を最重視していたのだから。私自身、「若いうちは教育よりも研究を大事にするつもりで勉強して欲しい」という秋永先生の言葉を直接うかがったことがある。助手身分につきものの煩わしさはあったに違いないが、倉塚さんは自分の学問研究の道を開拓することに専念していた。彼も私も、丁度自分のマスターピースの構想をかためようとしている時期であった。二人はいわば徒弟修業の仕上げ期間をともに過ごす親友になったわけである。

松沢報告は、倉塚さんには重要な古典的な作品から学んでいくという、極めてオーソドックスな戦略があった、と指摘していたが、私もその恩恵を受けた。私たちが採用された年の翌年、唯物論哲学者、大井正氏が政経学部に着任されたが、倉塚さんは大井先生の胸を借りてカントやヘーゲルの古典を輪読する研究会を始めようと、私を誘ってくれた。結局、その研究会への常連は倉塚さんと私だけになって、随分贅沢な個人教授の場になったのであるが、私にとっても貴重な学習体験となった。必要な語学の習得という点でも、倉塚さんは助手時代を存分に「戦略的」に生かしていたように思う。

また、私たちが就職した直後に「安保騒動」が起こり、その嵐が明治大学に押し寄せたことも幸運であった。当時の明治大学では、教職員組合や専任教授連合会などのアソシエーションが大学の自治や民主化、教職員の待遇改善などを掲げて動いていたが、「安保騒動」は否応無く私たちをより広い空間、街頭にまで連れ出したのである。倉塚さんも私も度々街頭のデモに参加して交流をひろげた。安保反対運動のピーク時には、当時の学長小出廉二先生が国会に向けての全学デモの先頭に立つ、というような感動的な一幕もあった。進歩的な教職員の声が尊重されるいい大学に就職できた、というのが当時倉塚さんと共有した実感であった。現状を快く思っていない教授たちもいる、解放感あふれるこの状態への「テルミドール反動」が起こらなければいいが、というのが彼の口から度々洩れる懸念ではあったが。

出会い当時の問題意識

実は、明治大学での倉塚さんとの出会いは再会であった。東大の学生時代、私たちは日本共産党東大細胞のメンバーとして学生運動に関与していたのである。大学管理法、レッドパージ、朝鮮戦争など、運動のテーマには不足のない時代であった。倉塚さんは法学部、私は経済学部で、日常的に顔を合わせていたわけではない。彼は派手な演説などは苦手だが、必要なときには自分の意見をはっきりと述べる、地味な裏方の仕事も着実にこなす。そういうタイプの「同志」だと思っていた。

だが、私たちの同志的な連帯感、1951年の2月に起こった東大学生細胞(国際派)内部でのスパイ摘発・査問事件によって、ほぼ完全に失われていた。私とその細胞のキャップであり、スパイの頭目とみなされて除名されるという事件だったので、後に「戸塚事件」ともよばれることになったが、それについては査問者たちの悲痛な体験を伝える文章がでているので、ここでは立ち入らない。*(1)ただ、倉塚さんが私を除名する細胞総会にでて反対意見を表明したという話はきかなかつた。その2か月後、細胞内の緊迫した論争をへて、私への除名処分は取り消され「名誉回復」となったのであるが、その「朗報」を届けてくれたのも倉塚さんではなかつた。一体、彼はこの事件の過程でどうしていたのか。釈然としないままの思いがけない再会だったのである。

いま一つ、私たちが明治大学で再会したときに、二人はまた、日本共産党の明治大学教職員細胞のメンバーであった、ということも告白しておきたい。西でも東でも、公務員や教職員の政党所属経歴などに目を光らせる自治体の首長が肩で風を切っているようなので、慎重を期さなければならぬが、倉塚さんは許してくれる筈である。私の場合は、「名誉回復」後も細胞活動に復帰する意欲を失っていたが、1955年の春、それまでの「極左冒険主義」や「セクト主義」を自己批判するという日本共産党の方向が伝えられたときに、元同志たちの説得に応じて復党していた。倉塚さんの場合は、弾圧犠牲者の救援会活動や歴史学研究会の事務局の仕事など、地味な仕事を続けていた筈だから、党籍は持続していたのかもしれない。

当然ながら、数年まえのあの屈辱的な事件をどう考えているのか、という深刻な話から私たちの会話は始まった。あの事件のころは、全学連のオルグ仕事で地方を回っていた、細胞総会のこともしっかりした記憶にない、というのが倉塚さんの最初の答えだった記憶する。もちろん、それだけで許せる話ではない。また、「処分の取り消し」「名誉回復」がなされたからといって、納得でき

る問題でもない。当時、「戸塚事件」で暴力的査問を強行していた武井昭夫氏が、あの事件についての自己批判を表明することなしに共産党の東京都組織の役員になっていた。一体、そういうことを許せるのか、ということも話題にした筈である。

倉塚さんは、私の言い分に耳をかたむけて、同情してくれた。しかし、当時私が考えていた「対策」については、直ちに賛成だとは応じなかった。前衛党の内部で起こる人権侵害の再発を防止する仕組み、それを具体化することが不可欠ではないか、というのが、あの「戸塚事件」以降の私の強い問題意識になっていたが、倉塚さんのくり返した返事は、気持ちは分かるが、そんなに簡単に解決できるとは思わない、ということであった。

丁度、あの衝撃的なスターリン批判が伝えられた直後で、共産主義者たちの間での深刻な議論が進んでいる時期であった。ポーランド、ハンガリーなど、社会主義圏での反乱が注目され、その評価をめぐる中ソ共産党間の対立も伝わってくる時期に当たっていた。あの頃は、倉塚さんの顔を合わせるたびに、国際共産主義運動の動向全体について、さまざまな情報を交換しながら感想を述べ合っていた。大井先生も私たちの話に加わってくださった。「戸塚事件」をいかに考えるか、という倉塚さんとの対話は、このような大きな流れの中で進んでいった。* (2)

結局のところ、倉塚さんは、「戸塚事件」は特殊な個別ケースではない、という立場をかためていった。そして、ユートピア的な理想を追求する革命運動に起こりがちな悲劇なのだ、それを学問的なテーマとして深く検討していくことを自分の課題としていきたい、と主張するようになった。

当時彼がくり返した荒削りの仮設と問題意識は次のようなものであった。即ち、1)この社会の根本的な変革のためには革命的独裁が必要になる、2)それが暴走して基本的人権の侵害がひろがる危険も生じる、3)それをチェックするためにはどうしたらよいのか、を研究する必要がある、と。

そして自分としては、歴史上注目すべき独裁を拾い上げ、それを実証的に検討していきたい、というのであり、誰もが取り上げるスターリン独裁、毛沢東独裁、ファシスト独裁などだけでなく、16世紀の宗教改革のなかでの神政独裁もとりあげる。独裁の類型的な研究を一生の仕事にするつもりだ、というのであった。

それは、実に雄大な研究プランであった。まずは宗教改革からはじめる。当面、これに全力を投入するというのが、彼の構想であった。実際、1960年代に、倉塚さんが明治大学政経学部の紀要に発表しはじめた連載論文は、それが決して大言壮語の類ではなく、着実な実証研究として進められていることを示していた。* (3)

倉塚さんとの日常的な対話は、1967年に中断した。69年にかけて、彼はドイツ、ミュンスター大学に留学して宗教改革史の研究に従事した。彼が帰国したときには、私はすでに明治大学を退職していた。当時の大学は「全共闘運動」の後遺症に苦しんでいたが、倉塚さんが帰国後に出版した『異端と殉教』(筑摩書房、1972年)には、それに応えるかのごとく、心情的ラディカルズムへの警告が明記されていた。彼の助手時代の仮説がより明確に、戒律として語られていることに感銘を受けたことを覚えている。* (4)

突如襲った病魔によって、当初の倉塚さんの雄大な研究プラン、独裁の類型的研究が未完のままに終わったことは事実である。だがそれは、彼のような実証の密度で一人の研究者が仕上げることは不可能だったのではないか。倉塚さんが築き上げた高い峰を一つの目安として、意欲的な共同研究が始まることをひそかに期待している。

* (1) 木村勝造「東大細胞の終わり——「戸塚事件」の記憶」(『一・九会文集』第二集、1997年)、安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』(現代の理論社、1976年)など。

* (2) 同時に、私たちの実践的な関心は、アメリカのヴェトナム侵略、それに対抗するヴェトナム人民解放戦線の闘いの進展に注がれていた。戦況を伝える新聞報道などに一喜一憂している日々であった。

* (3) 倉塚平「ジュネーブ神政独裁の理念と形態」I、II、III、IV(『政経論叢』1960.12, 1961.10, 1962.11, 1965.3)

* (IV)『異端と殉教』の「結び」には次のように記されていた。

「歴史の中になんらかの意義を認め、それを主体的に追求せんとするものは、二つの相反する魂をもたなければならない。大義のためには、あらゆる目的合理的手段を用いて目的を遂行する鋼鉄のような意志と、そしてかく闘争に血道をあげている自分をひそかに心の片隅で相対化しうるユーモアと理性とを。すなわち、改革者カルヴァンの魂とフマニスト・カステリオンの精神である。もしこの至難の業、両極的緊張に、耐え得ないものは、静かに己の「心の聖域」に閉じ籠るのが、「最も安全な道」(フランク)であろう。」

(250-251頁)

補遺

松沢さんの報告は、倉塚さんの著作を読み直す必要を自覚させてくれた。決して読みやすい文章ではなかったが、宗教改革期のさまざまなセクトの理念、その思考様式、それが広がる社会的根拠、生み出した慣行や制度、そこに内在する矛盾、諸セクト間の対立・抗争・悲劇などについて、これほど精密に実証的に追求した仕事は、他にあったのだろうか。改めて彼の仕事の大きさと鋭さに脱帽した。

同時に、彼の仕事からうけた刺激、学んだことなどを思い起こして、感謝の念を新たにしたい。倉塚さんの『異端と殉教』が出た頃、私は同じ職場の友人たちを誘って「日本の新左翼諸党派」の調査を始めていたのであるが、党派の機関誌・紙類の収集と解析におわれていた当時の私に、倉塚さんの仕事は、より深みのある考察にすすむためには何が必要かという問題を自覚させてくれた。私が担当した事例調査で、党派活動家の思想形成・変化のプロセスをおいかけ、党派の「社会的共鳴版」の形成、活動家による党派の選択などの認識装置を使おうとしたのは、倉塚さんとの交流によるところが大きかったと思う。

私たちの調査報告書は倉塚さんにも送った筈だが、残念ながら、どんなコメントをいただいたか、記憶に無い。思想の貧弱な仕事だとして読み通していただけなかったのかもしれない。だが、倉塚さんとの交流は断続的に続いた。社会変革を担うべき労働運動の主体の弱さを掘り下げ、新たな主体形成の可能性を追求しようとしていた私への叱咤と激励は絶えなかった。大きな仕事がまとまるごとに、丁寧な署名入りの著作を献上してくださった。『ミュンスター千年王国前史』(私家版、1986年)、『ユートピアと性』(中公新書、1990年)、訳業『千年王国の惨劇』(平凡社、2002年)などが、私の寝室の棚に備えられている。

最後に、倉塚さんに謝らなければならないことがある。彼の最後の大作『千年王国の惨劇』が出た直後、彼のご自宅に招かれて、奥様の手料理をいただきながら「出版記念のお祝い」をしたのだが、「もうやれることはやった、疲れきってしまった」という倉塚さんに、「助手時代に口にしてきた革命独裁の類型的研究が残っていませんか」というような無遠慮な言葉を吐いてしまった。本当は、「実り豊かな時代間の対話をこそ目指している」と宣言していた彼の胸をかりて、私の周辺にいるフランス革命、ロシア革命、中国革命の研究者たちとのラウンド・テーブルを設定すべきであったと思う。同時に、倉塚さんのこの長期間にわたる実証研究をとおして、彼が当初抱いていた理論や方法がどのように豊富化されたと整理しておられるか、という倉塚さんの研究総括のようなお話をうかがうべきであった、と思う。

いま一つ、「偲ぶ会」での私の発言についても、修正しておきたい。「秋永人事」で採用された私たちは、自分の研究に専念して学生への教育を軽視していたのではないかと、というのが私の発言であった。私については全くその通りであって、申し訳なかったと思っているが、倉塚さんの場合はどうであったか。怖い先生であったが、真面目な学生には真剣に向き合う先生でもあった、という「教え子」からの発言もあった。

『ユートピアと性』の「あとがき」には、ユートピアをテーマにした大学院のゼミナールでのある院生の報告がきっかけで、オナイダ・コミュニティへの関心が生じたと書かれている。ぜひそれを修士論文で書くようにとその院生に勧めていたのだが、悲しいことにその院生は間もなくこの世を去ってしまった。「彼の志をなんとか引継いでやりたいという想いから、私もこの研究に入っていくことになったのである。本書がわが国のユートピア研究にいささかでも役立ってくれるならば、あの世から彼も笑みをおくってくれるだろう」という言葉が記されている。教師としての倉塚さんの真面目な学生への気持ちが伝わってくる文章である。

難をいえて、
作業シート
私がか
やせ 未整理
に私がか
いふか?
倉には
伝わりにくい

このか
会っての
このか
私にか
いふか?
いふか?

和田さんの報告をうけて、倉塚さんの日韓連帯運動への傾倒と彼の宗教改革史研究との関係について、彼に直接聞いておきたかった、と思った。先に掲げた『異端と殉教』の「結び」の言葉が書かれた直後に、倉塚さんは「心の聖域に閉じこもる」「最も安全な道」からでて、日韓連帯運動の組織者としてのパトスのこもった綱領的アピールを執筆した、ということなのだから。おそらく、改革者の立場にたつ政治思想史の研究者である以上、避けられない試練なのだ、と観念しておられたのであろう。当時助手であった中川雄一郎教授のご記憶によれば、倉塚さんは日韓連帯運動の意義について授業でも熱心に説いていたし、そのためのカンパ集めにも積極的に動いていたという。

実際、平素は控えめでシャイな倉塚さんであったが、歴史を左右する事件については決然と発言することを厭わない研究者であった。今回はじめて目にしたのだが、『明治大學教職員組合の半世紀 1947—1997』（明治大學教職員組合発行）には、1965年4月20日に駿河台91番教室でひらかれた「ベトナム情勢をめぐる研究・講義集会」の演壇中央に座っている若い倉塚さんの写真が載っている。それは彼が専任講師に昇格した直後のことであった。おそらく講義でもベトナム問題をとりあげていたのであろう。それは政治思想史を専攻する研究者としての当然な教育実践と意識されていたに相違ない。『異端と殉教』の「結び」に記された戒律は、教育研究者としての彼自身に課した戒律であったのかもしれない。

以上、「偲ぶ会」以降の倉塚さんとの交流について一筆しました。かけがえのない友人に先立たれた寂しさは消えませんが、彼の魂を身近に感じる日々を持つことができました。貴重なご報告をして下さった松沢さん、和田さんに改めて感謝すると同時に、「偲ぶ会」の準備・司会など、一切を引き受けて下さった生方卓さんに、厚くお礼を申し上げます。
(2012年5月7日脱稿)

〈記事出典コード〉サイトちきゅう座 <http://www.chikyuzo.net/>
[study520:120628]